



## 染谷茂先生を悼んで

宇 多 文 雄

2002年3月23日、染谷茂先生が、自宅近くの病院で亡くなられた。享年88歳であった。高齢からくるご不調はあるにしても、元気な毎日を過ごされ、緊急入院の翌日になくなられた。大往生と申し上げてよいだろう。

先生は1935年に東京外国語学校ロシア科を卒業され、北樺太石油勤務をへて、ハルビン学院で教鞭をとられた。終戦直前に召集を受け、不運にもソ連に11年間抑留された。帰国後は新設された上智大学ロシア語学科で教えるかたわら、翻訳、文法解説、辞書編纂などの分野で少なからぬ業績を残された。日本ロシア文学会では、70年代後半から80年代にかけて何年か理事をつとめられた。卓越したロシア語の達人として知られた、と言っても、どこからもご異論は出ないものと思う。

以下に、告別式の折の私の弔辞を採録することをお許しいただきたい。

本日ここに、染谷先生とお別れすることになり、私たち教え子は深い悲しみを覚えるとともに、心の支えを失ったようなさびしさを感ぜずにはいられません。私たちがロシア語に関連した仕事をするとき、多少なりとも自信のようなものがあつたとすれば、それは染谷先生の薫陶を受けたことを根拠としており、自分のうしろには染谷先生のお力がある、と感じることができたからです。

長かったシベリア抑留を終えて帰国された先生は、折しも開設されることになった上智大学ロシア語学科で、一期生から教えることになりました。以来一九八三年に退職されるまで、二六年の長きにわたって、学科の指導的教授として教鞭をとられました。その間には八年間も学科長をお勤めいただきましたが、このような役職は先生の好まれるところではなく、若い教員のために必要なら、仕方がないから引き受けよう、というお心遣いでした。事務的な仕事はお好きでも、お得意でもありませんでしたが、手を抜くようなことはせず、誠実に任務を果たして、ロシア語学科の発展のために貴重な貢献をされました

染谷先生の授業の魅力は、直接習わなければわから

ないでしょう。私は何人かの知り合いに、それを説明しようとしたことがあります、わかってもらうことはできませんでした。底知れぬ量と質の、研究と学識に支えられた解説は、聞く者を圧倒しました。私は今でも、折にふれて当時の講義ノートを開きます。

「寝ころんでロシア文学を楽しむことができる程度のロシア語を身につけたい」というのが、先生の口癖でしたので（この一見のんきなことばの裏に隠されている意味は、教えを受けた者ならばわかることです）、論文や解説書の類はあまりお書きになろうとしませんでした。それでも、深い学識から生み出された『イワン・デニーソヴィチの一日』の対訳・注釈、東郷先生他と編集された『研究社露和辞典』、それまでに発表された論文をまとめた『染谷茂ロシア語文法小話』、コロレンコの『マカールの夢』の訳注、ソルジェニーツィンの自伝およびいくつかの作品の翻訳、ダニエリ、シュクシーンらの作品の翻訳などのお仕事が残されていることを、私たちは幸せに感じます。

染谷先生はユーモアたっぷりの明るいお人柄でしたが、同時に人を見抜く鋭い勘をおもちでしたので、ある意味でこわい方でもありました。先生の周囲には、先生を慕う学生・卒業生の大きな輪ができました。ロシア語を仕事とする者、ロシア語の勉強に強い意欲をもつ者は当然ですが、必ずしもロシア語を熱心に勉強するわけではない学生にも慕われたことは、先生のお人柄をよく示しています。

染谷先生は、何をするよりも、勉強をしているときが一番気が休まる、という類まれな自然体の勉強家でした。晩年になっても研究意欲はいささかも衰えることなく、いつも本を読んでおられました。そのような日常生活が最後まで続き、不本意な病床生活を送らずに、わずか一日の入院で一生を終えられたことは、私たちにとってせめてもの慰めのように思われます。

先生は今頃、敬愛してやまなかったポツタヴィナ先生と再会され、手を取り合っておられることでしょうか。染谷先生、安らかに休みください。そして、今後も私たちをお見守りください。